太平洋戦争末期の地震被害を捉えた米軍撮影の航空写真

Earthquake damage’s aerial photos by U.S. Forces in the last period of the Pacific War

小白井 亮一 [1]; 宇根 寛 [2]; 長谷川 裕之 [2]; 鈴木 康弘 [3]; 小林 政能 [4]; 永井 信夫 [5]
Ryoichi Kojiroi[1]; Hiroshi Une[2]; Hiroyuki Hasegawa[2]; Yasuhiro Suzuki[3]; Masayoshi Kobayashi[4]; Nobuo Nagai[5]

[1] 地理院; [2] 国土地理院; [3] 名大; [4] (財) 日本地図センター研２; [5] なし
[1] GSI; [2] GSI; [3] Nagoya Univ.; [4] Second Research Dept.,Japan Map Center; [5] none

太平洋戦争中，米軍は作戦の計画，実行，効果の判定のため，日本上空で偵察用の航空写真を多数撮影していた。特に，1944 年からはグアム島やサイパン島などを基地とする偵察機による撮影が行われるようになった。これらの航空写真は，現在のものと比べると，フィルムやカメラの性能がやや劣るものの，判読には十分に耐えるものである。現在，このような航空写真は米国公文書館において公開されている。

筆者たちは，太平洋戦争末期に発生した被害地震，特に 1944 年東南海地震 (M7.9：1944 年 12 月 7 日) の被害の状況がこのような偵察写真に写っていないかどうか，という観点から調査を進めてきた。この結果，1944 年 (昭和 19 年)12 月 10 日午後 0 時〜1 時に三重県の尾鷲地区を撮影した航空写真が存在し，そこには津波被害の様子が記録されていることを見出すに至った (小白井ほか (2006))。この後，尾鷲付近の航空写真について，尾鷲湾口付近まで詳細に見ていくと，津波で流されたと考えられる漂流物も確認できることが分かった。

愛知県半田市の沿岸部の航空写真 (1945 年 7 月 5 日撮影) には，地盤の液状化による噴砂現象の跡と思われるものが多数写っていることも発見した。これらの噴砂現象は，東南海地震ないしは三河地震 (M6.8：1945 年 1 月 13 日) によるものと思われる。

参考文献

小白井亮一，小林政能，永井信夫，鈴木康弘 (2006)：津波被害を捉えた航空写真　－東南海地震の新たな資料を発見－，写真測量とリモートセンシング Vol.45, p69-72